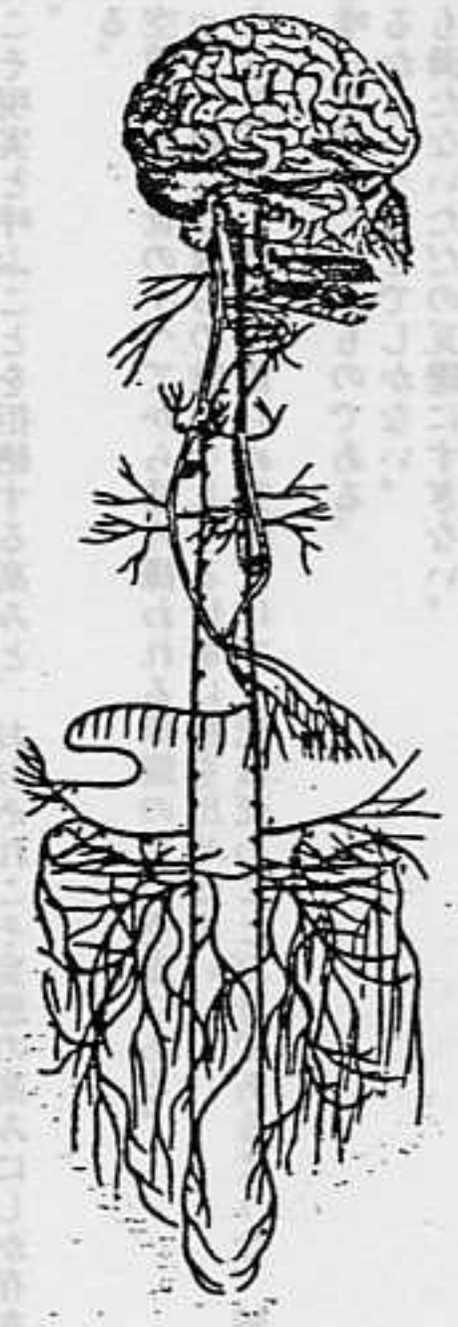
緑字生ズ

紙田　彰



妄想宣言

我らの時代はあまりに遠くへ押しやられてしまっている。
我らの時代は永遠に来ぬのではないかという直立的な諦観から始めるべきではないのか。
時代そのものを断ち切ったときこそ我らは我らの愛するものの側についたというべきではないのか。
それはある種の狂気の産物、妄想の全体に相渉ることになるのではないか。
少なくとも近しい至玉は逝ってしまっている。
我らは百年と千年の計をもって、つまりは歴史の時間と肉体を完膚なきまでに我らと切り離した場所から我らの結託すべき詩
という全体に結びつくべきではないのか。
もうすべてを無視してもかまわないのではないか。
もともと我らは我らの方法においてしか、詩を、文化を愛することのできぬ場所にいたのである。
我らが書くことの現実は、それこそ現実と呼ぶことを拒絶する高みと、おおそれこそ妄想の高みにしか存在せぬものであろう。
軟弱な土壌は壊滅するであろう。
世界は軟弱な土壌そのものである。
我らの現実はそれこそあまりに空想的な、世のすべてから忌み嫌われる際限のない空虚にある。
君らとは無関係であると一言いって、我らは我らの唯一なしうる仕事に精を出せばよい。
よしや、それが数億年の先であろうと、我らは尻を割らぬ覚悟だけで、死は死ぬことだけであるような、純粋な妄想の宇宙に
飛び出してゆけばよい。
我らは絶対零度と絶対の燃焼を唯一可能にできるものである。
文化というものは何をなしているかということでしかない。
人は死に、人は生れ、星の屑にも満たないただの瓦礫にすぎない。
また文化とはいわゆる存在証明でもない。
ただ、あることの覚悟にすぎない。
それは証明もされない、それは何ものかの完成でもない、それは己れを極限に合わせることである。
それが何ものかであるとすれば、どれだけの極限を見やっているか、そのことによってその不合理を相手にどれだけ喧嘩がで
きるかにかかるという、己れだけの問題であろう。
すでに世界はない。
すでに時代はない。
すでに永遠に未来は、よくいわれるような形ではありえない。
我らは宣言すべきか。
いますべてとは無縁である。
無縁でないものこそ存在しない、と。
我らは、書くという、何ものとも無縁で、無意味で、無価値で、ただかくあらざるしかありえぬという方法性だけで己れを律
するという、覚悟だけをもつものである、と。

緑字生ズ

29

りりりり四季
愛が愛であるから
（未来の歯茎を破って）
花のみの奇怪ふる

抗生物質が
*morale*を破壊したか

30

崩壊辞典とべにしょうが
猫の死骸が吊られている
肥料にもならぬから
小便をする

鏡よ　虹よ
狂おしくあやしかるべき
死は凍る
銀色の粉は

光のかけらなんだわ
そのとき少女は孕んでいた

31

雨上りの夜
ハヴァナの吸口を噛み切る
烟の中に
童女の顔が浮かぶ
その幻を環にして吐くと
時間の翳が
みどりになる

32

老いた額と古い都市
ヴィーナス
時の外側を歩く者たち
少年の息をとめる者

33

歩いているときに、なにげなく後ろを振り向いた
ことがおありでしょうか。そう、いま感じている

のはそのことなのです。つまり、影のような、なにやら得体の知れないものにつきまとわれているような気がして振り返ると、暗黒の底の方から、冷たいまなざしが、肉体はもとより、心の深奥まで貫いてくるような。危惧とか恐れなどとは違って、周囲のあらゆるものが憎悪している、いや、自分の存在自体が己れを憎んでいるというような、死というちっぽけな現象よりも大きな苦悩。そのままずっと歩いていくと、自分の跫音が、いわば十三階段への招きに思われ、それで後ろを見てしまったのです。自分でも何もないように思いましたが、そこにはもう、ありとある憎しみが大きな渦をなして、こちらを睨んでいるのです。けれども死を与えようなどとはせず、こちらにしても死を選択する自由すら奪われているような気がして、彼らはそのような存在を徹底的に嘲笑し、恥辱にまみれさすのです。気にすることはないよ、ただの分裂傾向だといわれるかもしれませんが、断じてそんななまやさしいものではありません。ところで、崖から突き落とされた夢をご覧になったことはおありでしょうか。

34 無記名の日記の中の名前の

あなたの隣に腰かけて
水仙は革命家である
草笛を指の間で鳴らすと
信号が送られてきた
いつか敵に出会ったら
そのときこそ
一緒に死のうと
あなたは
いついつに
秘密に連絡すると告げる

この永続的非和解
強姦へちまめ

35 アルティスへとやって来た
心あたまる辛さ
やりばのない眼
瞼の裏底
瞳孔の節が外れる
膝の関たときに挫いたのだ
殴られ

ぱさりと残飯入れに捨てる
時間が詰まっていたので
痛がって声を出すこともない

36
門(フィーレ)の傍らで
聖マリア像が砕けている
生と死で区別できないから
呪われている
キッタリア・ダーウニィという茸を拾い
森をさまよったあげく
肉体を地に捧げた

37
〈鬼の目おちて
冥土の唄にひえと
ああア　お腹の首の声
〈鬼の目ななつ
星珠ころげひえと
お腹の　お腹の首の声
雪花菜(おから)！
死滅したきれいな肉

38
ルーナよ、聞け
宇宙の裂目から
巨大な蛆虫が涌き
ドン・キホーテが凱旋した
怠状を示せ
はじめははじめられたときから
ぬかるんでいた　と
つまり腐敗である
ためにバラの花に包まれ
夕陽は眠りに就く
世紀の
ために沁みる
五体に
死のリズム

39
熔接工の家を訪ねると
小さな煖炉に
ヴァシリキ式の陶器
燃える水晶時計

雪という字のある娘が死んだので
雪という字のある盲が死んだので
雪という字のある記憶が死んだので

煤けた顔を拭うと
その男は呟いた
たぶん偏執狂であろう
いたわしい別離であったろう

40

己れの造物主が己れだと知った人形が
いささかくたびれはてたことを
死体のふりして
不可知論を唱えた

アグライアー
つねに架空の少女だった
玩具は嗤う
つねと変わらぬ
機械仕掛で

41

朝を抱きしめるように
冷えたビールを呑んだ
それからいとまごいをし
ほとぼりのさめぬ夢を思い
沼地を歩いた

ホオジロの屍体
こわれる風景
あるかなきかの暗い捷径
神経が疲れている
薄笑いを泛べ
うたたねできる場所を捜した

朝は家々をつらぬいて
もう睡りこんでいる
心臓が冷たい
意志もまた冷たい

42

夕陽が渓間にとどまっている
呆れガラスのはばたき
時忘れのなめくじ

樹々の間に生まれた迷路

宇宙を褐色の壺につめこみ
化石の刻を密封する
現代文明のアッテカである

43

くりなされた空
（闇の空模様）
猛禽類が翔ける
その飛跡が尖っている
鋭い暗闇の
エーテルの流れのようでもある
彼らは翼で虹を蔽い
ものみの塔をつついた

44

弦のような肋骨
ブナの木蔭で
死体の手の甲がねられる
下草に埋れて爪が光っていた
デキシーランド・ジャズがほろ苦い
邑人よ　耳をそばだてよ

45

frogよ　跳躍よ
つながりにたたみかけ
まらが抜けたり刺さったり

きちがい薔薇の咲く丘で
あいみたがいの知らんぷり
おまえがclitorististだから
無限にさいなまれる

ミズアオイよ
安堵して振り返るな
野の花が濡れる
白骨がしぶきを浴びる
道の向こうから来る破戒僧の
犬歯が自然に反している

46

ずいぶん深い思考に浸っていたときに、急に目の前がぼんやりして視点が定まらなくなった。椅子から立ち上がると、気分を落ち着かせるためにラム酒を啜った。空間が歪むように、思考の中に何か空洞でもできたのだろうか。アルコールが徐々

に全身を廻り、指先の神経まで麻痺が達した。精神と肉体がとても楽になっていた。自分自身がどこか別の次元を移動しているかのように爽快だった。しかし、本当はとんでもない悲惨さの中にいた。振り返ると、漆塗りの置時計の黒い振子が斜めに傾いだまま、こそとも動かないのである。

時計の文字盤を蔽うガラスに、少年は異様なものを見た。そこにあるものは、目の両端が吊り上がり、顎が醜く歪み、黒々とした肌は錆びついていた。立ったままの姿勢を永遠に保たせるため、全身の骨格が硬い鋼鉄に変質しているに違いなかった。少年の思考は鈍い軋り音をあげるばかりで、声を出すことも、身ぶりで何かを示すこともできない。ところで少年は、病室の中で狂人は何を考えるのだろうとつねづね考えていた。そう思いながら病人を訪ね歩くのが少年の日課だった。その日も、その日課を果たそうとしていた。けれども、このとき、少年はつねとは違った少年になっていた。狂った人が何を考えているのか知りたくてたまらない。少年は約束の時間を気にした。鍵は誰も開けてくれない。時計は永遠に停まっている。

歴史が破壊されつくすならば
なんという痛快

時を告げる鳥を捜すには
永遠の道草を喰わねばならぬとは
ああ！
頭脳崩壊
あっかんべえ

47

火の時間の火
手のつけられぬ立体

48

やはり女は開かれていた
なぜなら　黝んだ乳首が冷たい
ゆで卵を剝きながら
オオカミが啼く

ぶしつけな微笑と
きどった挨拶
胸の双つのふくらみに
黒百合の花を与えよう
Rheumatismusの脚と
夜の声が冷たい

感覚を裂いて
夢をなせ
栄光を鳴らす
骨よ

タロットの背後に
スパイがいる
おとなしそうな顔つきだが
何を考えているかわからない
一枚一枚めくりながら
占おうか　ぼくの語の裔

49

ヤマトネコ
光はアルコールの匂いを放つ
言葉つきの怪音波
詩が書けないので
妄想を焚く
爪の伸びた
皺だらけの手

50

海面に辷り落ちるもの
時へ向かう時の皮質
また人骨が出てきた

突堤を駈ける小犬
冬の海が流れている
夜は死に近づいているようでもある

岸壁で砕ける波
愛するふりして肩を抱く
肌がざらざらしていた
涙がにじんできた
沈没した船の上を
ウミネコが飛ぶ

船を待つ旅人
ブランデー漬けの桜桃を
ひとつぶつまんで
彼は酔う

歩痛という言葉
虫歯で死んだ女の
両足に巣くった虫歯の足よ

51

僧院でコーヒーを淹れる
特別な日
ドイツの農村では
花々が枯れる

ホフマンという男が
聖母像を抱いていた
そのかたわらで
太った尼僧が
青い脚を伸ばした

52

死装束の姉をかき抱く少年
銃と毒
筋肉のわななき
彼らは追放されていたのだ

狼たち
月の輪熊
鉛と砒素

53

ひとり　ひとよのふかなさけ
ふたり　ふたなりうしろがみ
さんにん　さんさんずのかわわたし
よにん　よるべもぬしもなく
ごにん　ごくもんぶらさがる

見よ！　権力のなわきれ

54

眇の売笑婦に地図をさしだした
市場の隅に
夜の脂がたまっている
彼は旅に出ていて
出立したその朝には
ここまでの道が消えていた

雨が上がると
色の足りない虹がかかる
そのとき眇の女は
変ね　夜だのに
と呟く

祭壇は白い骨で組まれている
乳呑児に舌はない
天蓋には男根がぶら下がる

痩せたリャマが
夜の街をとぼとぼ歩いている
リャマの背の
眇の女の
あてどなく疾走しようという夢

火焙りだ
火焙りだ
人々は喚きたてた

羊皮紙に刻まれた
地図をしまい
地球は停止していると思う
雨が降りはじめ
眇の売笑婦が背を向ける
その白い影に別れを告げる

55

山間の自然道のわきに
朽ちかけた雑木林と

寂れたせせらぎがある
ロートレアモンのことを考えながら
しばらく歩いてゆくと
湯の匂いがしはじめる
山並の向こうに
雲が涌き出していた
どこから来たのか
鉄屑を籠に背負った男と擦れ違う
男は挨拶のかわりに
古い神の名を言った

目の前に
湯煙が立っている
紅梅の小枝を持った
肌の白い女が
裸に見える
そういえば
泣き顔にも思われる
雑沓で見失った
恋人の面影に似ている

盃は眠っているか
そんな言葉が口をついた

死刑執行官が、手袋を——